

引揚者として心は錦なのに

北海道 小田 みよ子

昭和十八年二十歳の春でした。食糧事情も衣料も生活のすべてが日毎にひっばく、都会の人々は田舎へ田舎へと疎開してくる頃、祖母を亡くし既に樺太で生活していた父が帰郷して樺太は物資の配給事情など外地ゆえ、優遇されるからと説得されて故郷宮城県をあとに樺太へ渡ったものでした。

しかし、それも束の間樺太とて店頭には欲しい物など何もなく、敢えて言えば空襲のないのが少しのんびりかと思う程度でした。

十九年結婚の話が決まったが、嫁入道具としては欠かすことのできない鏡すら手に入らずやっとの思いで探した壁掛け用の小さい鏡と紙を固めて作った洗面器一つだけ、これは手早く洗面しないと濡れてくるものでした。

その他の嫁入道具といえは古い行李一個と古い布団、

洗濯タライの替りに漬物用樽一個だけ、クリームすら買うことが出来ず、知合いの髪結いさんからやっとなんてもらったクリームはとても貴重品でした。

終戦といえは忘れることのできない二十年八月十六日の朝のこと、敗戦を知っても女だけの我が家では何をすればいいのかも考えつかず眠れぬ一夜が明けけるが昨日まで賑やかだった近所の子供達の声が全く聞こえず不審に思つて外へ出ると部落の九軒中、我が家と病人のいる二軒以外は夜の間女子供が北海道へ向かつて男だけが残つて火の消えたような街となっていた。このとき私と姑は手を握り合つたまま言葉もなく、何十年苦楽を共にした仲でも自分以外に信ずることの出来ないことを痛感。

リュックに詰めこんだ荷物を背に南へと向かつたが、道にあふれている北からの避難民は船出もできずまた重い足を引きずつて日本人が半分もいなくなつたうつろな街へ戻つた。

これからは、デマに一喜一憂しながら、ソ連兵にビクビクし、若い女は頭を丸坊主にし、男装をして身を守ら

なければならなかった。

馬齡薯や人參を求めてやってくるソ連人の言葉が通じず、こぼめば恐ろしい目に合うのである。

生活様式の違いで靴のまま室内にはいつてきたソ連兵をとがめて射殺された人、言葉が通じないための誤解で射殺された隣人を目のあたりに見たとき、これが敗戦国なのだと思います。

二十三年になって漸く引揚げることができると知らされたときはどんなに裸でもいい、とにかく帰りたい、帰るんだとそれのことだけを考えて真暗な貨物列車の中も重なり合ってもいい日本に帰れる嬉しさで一杯でしたが、帰国して待ちうけていたものは無一文の引揚者にとっては冷たい世間でしょうかありませんでした。

夫の消息を知るまでの不安と、やっと岩見沢の炭鉱にいくことを知ってたどりついたが、満足な着替えもなく着のみ着のままの私に夫のシャツを貰ってセーター替りに着たり軍隊払下げの毛布でオーバーを作っては寒さを凌ぐ生活でした。

どんなに戦後といっても土地の人は穴があけば継ぎ当

てにする端切れくらいは十分持っていました。引揚者にはそれさえありません。

こんな私達を見る目は冷たく、貧しいことは悪いことなのか、私達は一片の物乞いをしたことも、盗みをしたこともなく、何をしたというのでしょうか。

戦争という名のもとに耐えて耐えて青春もなくすべての私有財産を捨てて引揚げなければならなかったのは自分のせいではないのに。

こんな思いも歳月とともに風化していくといわれますが、私の心は永久に風化も忘却もあり得ないことです。

姉は目の前で銃殺

北海道 大谷 輝子

その頃の私はまだ十八歳、三月に学校を卒業して親元を遠く離れ、豊原鉄道局に勤めて五か月、月に一回の休日には友達と、あの当時は交通が不便だったが二十里以